

育苗管理の要点と作業手順(高密度播種苗)

育苗計画

※種子消毒をモミガードCで行う場合

品 種	てんたかく81	てんこもり	コシヒカリ
田 植 基 準 日	5/3	5/11	5/15
比 重 選 水 洗	3/31	4/10	4/16
種 子 消 毒	3/31～4/1	4/10～11	4/16～17
浸 種	4/1～14	4/11～22	4/17～26
催 芽	4/14～15	4/22～23	4/26～27
播 種	4/16	4/24	4/28
出 芽	4/16～19	4/24～27	4/28～5/1
平 床 搬 出	4/19	4/27	5/1
平 床 日 数	14日間(平床搬出日を含む)		

※苗の生育に応じて田植までの計画を立てる。(老化苗防止のため)

種子の確保

○必要種子量の目安

品 種 名	箱当り乾粳重	植付け株数	必要箱枚数	乾粳種子量	準備する種子量
てんたかく81	250g	70株/坪	11枚/10a	2.8kg/10a	3.1kg/10a
てんこもり	250g	60株/坪	10枚/10a	2.5kg/10a	2.8kg/10a
コシヒカリ	250g	70株/坪	11枚/10a	2.8kg/10a	3.1kg/10a

※植付け株数を遵守して田植を行う。
※メーカーや機種によって必要箱枚数が
多少前後する場合がある。

メーカー	必要箱枚数(目安)	
	70株/坪	60株/坪
クボタ	9～12枚/10a	7～10枚/10a
イセキ	11～13枚/10a	10～12枚/10a
ヤンマー	9～11枚/10a	8～10枚/10a

比重選

袋詰め

器具の消毒

種子消毒

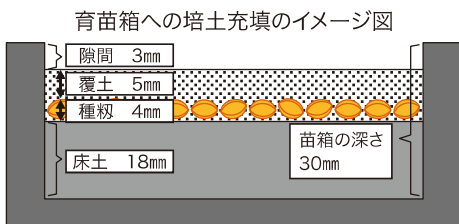
浸 種

催 芽

※慣行苗栽培に準ずる。

床土の準備

○育苗箱に3.6kg(18mm)の厚さに均一に詰める。
※苗箱上部に隙間(3mm)を設ければ培土への吸水量が
増加し、乾きにくくなる



播 種

○催芽粳は、手で握ってもくっつかない程度まで乾かす。
○播種量の目安(乾粳の約25%増の重量)
○播種時消毒にダコレート水和剤及びカスミン液剤もしくはカスミン粒剤を使用する。
○箱苗施薬剤を同時施用する場合は播種後、覆土前に行う。



てんたかく81 312g/箱(153粒/25cm²)
てんこもり 312g/箱(153粒/25cm²)
コシヒカリ 312g/箱(153粒/25cm²)

覆 土

育 苗 器

平床の準備

※慣行苗栽培に準ずる。

平 床 搬 出

○搬出後覆土が持ち上がっている場合は、ほうき等で軽く払落し、土を落ち着かせる程度にかん水する。
天候に応じてかん水量を調節する。
○種粳が露出している箇所には覆土を追加する。
※ムレ苗防止と発根促進のためナエファインフロアブルを散布する
(使用上の詳細はP.48を参照する)



緑 化

寒冷紗被覆期間目安 [てんたかく81:3～5日間 てんこもり:3～4日間 コシヒカリ:1～2日間]
てんこもりは、搬出直後から3日程度は2重掛けとし、夜温を高く保つためハウスを閉める時間は午後3時など温かい時間とする。

○第1葉鞘長が種粳からコシヒカリは2.0～2.5cm、てんこもりは3.5～4.0cmになったら寒冷紗を取る。
○種粳が密集し徒長しやすいため、換気を徹底する。

温度管理の目安

	緑化期	硬化期
昼 温	28℃以下	25℃以下
夜 温	10℃以上	

※30℃を超えると細菌性病害の発生や苗の軟弱徒長を助長するので、換気する。



寒冷紗を取るタイミング コシヒカリ

硬 化

○かん水は、原則として早朝1回とするが、慣行苗よりやや多くする。
かん水量、かん水時間は天候に応じて調節する。

代 か き

○田面が硬すぎると植付穴が戻らず、浮苗や除草剤の薬害が発生しやすくなる。
○田面が柔らかすぎると、植付姿勢の悪化により水没・欠株になりやすくなる。

田 植 前 日

○苗箱施薬剤は10a当たり1kgになるように必要箱枚数に応じて
散布量を調節する(ただし10a当たり1kgを超えないよう注意する)。

箱粒剤必要目安表						
箱枚数(10a当たり)	8枚	9枚	10枚	11枚	12枚	13枚
箱粒剤(1枚当たり)	125g	111g	100g	91g	83g	77g

○田植時に側条施用する場合は、専用の機械を使用する。

田 植 え

○高密度播種苗に対応した田植機または、専用キットを装着した田植機を使用する。
○田植機の植付本数、施肥量、植付深度の設定確認をしっかり行う。
○天候の良い日に行く。(※晴天時であっても強風の場合は田植えを避ける)
○丁寧に、ゆっくり浅植え(3cm)にする。
○生育ムラの激しい苗は使用しない。
○1株5～6本植え付け本数とする。
○除草剤を田植同時で使用する場合は初期剤を使用する。(※体系は正剤は使用しない)
○慣行苗と比べて葉齢が小さく軟弱なため、田植後は浅水管理とする。
ただし、気温の低い日や強風の際は深水管理を行う。

